

門脇裕さん『とっておき、隠岐の魅力を語る』

‘090415(水)18:30~

ホテルアイボリー茜の間

わたしは、島生まれの島育ち。島生まれといいましたが、実は終戦の日の6日後に大陸で生まれました。

これまでのアイボリーフォーラムの講師を拝見しますと、道を究めた方や各方面の達人の方が並んでおられます。でも、わたしは、隠岐の人間として、今日はみなさんに隠岐のことを知っていただこうと思っています。よろしくお願いします。

●隠岐という島

隠岐は、伊丹空港から 270 km の位置にあります。広島や金沢などとだいたい同じ距離です。

「隠岐」を「おき」と読める人が、最近は少なくなってきました。ですから、このごろはルビを振るようにしています。どうかすると長崎県の「吉岐(いき)」と混同されることさえあります。

隠岐の島町は、島根県に属しています。郵便番号のはじめの3ケタは「685」です。実は、島根県の郵便番号は「69」でして、この隠岐の島町の「68」というのは、鳥取県の郵便番号なのです。島根県に属しながら、郵便物は鳥取県に集められるからなのです。

隠岐は隠岐諸島と呼ばれ、人の住む島が4つ、隠岐の島町を含めて島ごとに4町村あります。

隠岐諸島を合計した面積は 346km² で、琵琶湖の半分ぐらいの広さですが、いずれも山がちで平野が少ないという地形です。このうち「島後(とうご)」と呼ばれる一番大きな島が隠岐の島町です。

現在、4町村の人口は2万3千人ですが、昭和38年(1963年)ごろには4万8千人だったので、約半世紀の間に半減したことになります。

わずか175km離れた海上には竹島があるように、隠岐は「国境の島」でもあります。また「とっておき隠岐の宝島」などと表現されます。都会の方には、目でみて分かっていただけでなく、隠岐を心で感じ取っていただけを願っています。

「隠岐や今木の芽をかこむ怒涛かな」

これは昭和16年(1941年)に、俳人加藤楸邨氏が36歳のときに隠岐に来られたときの句です。目をつぶって聞くと、春の隠岐が浮かび上がってきます。昭和百句の一つになっております。

「天高く遠流の遠を飛びて来し」

中学の恩師から聞かされた山口誓子氏の作で、これも隠岐では大事にされている句です。

隠岐のお向かいの松江に居をかまえた小泉八雲、ラフカディオ・ハーンも明治22、23年ごろに隠岐に来ました。

「私は隠岐で、強い力でその影響を遠くまで及ぼしている文明から離れているという喜びを味わい、人間の生存にとって、あらゆる人工の及ぶ範囲を超えて、自己を知る喜びを知ったのである。」という言葉を残しています。

では、隠岐のいろんないいところをご案内しましょう。

●隠岐の景観と自然

隠岐は、昭和 38 年（1963 年）に大山隠岐国立公園に指定されました。なかでも、巨大な岩がアーチになった通天橋や、海面から 260m も立ち上がる断崖などがある国賀海岸が有名です。この国賀海岸では牧畑や馬・牛の放牧がおこなわれています。隠岐馬というこの地独特の馬もいましたが、これは残念ながら絶滅してしまいました。

また、浄土ヶ浦海岸、白島（しらしま）海岸、ローソク岩などがあります。ローソク岩は、向こう側に夕陽が沈むときには、ほんとうにろうそくに火が灯ったようになるので、観光客に人気が高いスポットです。

トカゲ岩というのは、大きなトカゲが崖を登っているようにみえる不思議な岩です。

福浦トンネルは明治時代に、村と村を結ぶために、海岸の岩をのみと槌だけで掘った手掘りトンネルで、平成 17 年（2005 年）に国土交通省の選奨土木遺産を受賞しました。

ことし国土交通省が全国から募集した「島の宝百景」に、隠岐の島町の 2 か所が選ばれました。「隠岐・島後の舟小屋」と「隠岐の牛突き」です。隠岐全体では、ほかに西ノ島（西ノ島町）の「絶景と牧畑」、知夫里島（知夫村）の「輪転式牧畑の名残」も選ばれています。

牛突きはあとで紹介しますが、都万（つま）の舟小屋は、杉皮で葺かれ、その上に石を置いて押さえた屋根が海岸線に 20 も連なる独特の風景をみせています。昔はわたしたちも同じ葺きかたの家に住んでいたものです。

隠岐の自然では、杉の巨木が多く「かぶら杉」や「八百杉」が有名です。かぶら杉は、幹が根元から分かれて鐮矢（かぶらや）の形に似ているのでこういう名前がつけられたといわれています。八百杉というのは、八百比丘尼が隠岐に来て植えたという伝説があって、推定樹齢が 2000 年、根元の周囲が 20 メートルぐらいあり、屋久島の縄文杉に匹敵するともいわれています。

また、隠岐にはイタチ、ノウサギ以外の禽獣類（ケモノ）はいません。こういったこともあるのか、オキマイマイ、オキサンショウウオなどの隠岐固有種が多いです。またナゴランの北限地であるほか、ハマナス、モッコク、モチは南限地であるなど、植物種も豊富です。

●隠岐の歴史

隠岐は、太古から常に中央政府と関わりをもってきました。

国産み神話では、古事記では隠岐は 3 番目に生まれた島、日本書紀では 8 番目の島になっています。こういったこともあって、隠岐の人たちはけっこう気位が高いのかもしれませんが。

それから、遺跡から古代の木簡が出土しますが、それにはアワビなど隠岐の海産物が中央に運ばれていたことがしばしば出てきます。駅鈴（えきれい）は古代のお役人が出張のときにたずさえたものらしいですが、現在では隠岐国の 2 つしか残っておらず、重要文化財に指定されています。

中世以降、隠岐は、遠流（おんる）の島と定められました。後鳥羽上皇は 18 年間隠岐に配流され、隠岐で亡くなりました。後醍醐天皇は 3 年ほど隠岐に流されていたことはよく知られています。このこともあって皇族のほとんどのかたは隠岐にお参りにこられるのです。こういった流人とともにたくさんの本土の文化が隠岐に入ってきました。

近世では、川村瑞賢が北前船のルートを開発しました。ベテランの船頭は、能登半島からまっすぐ隠岐をめざしたといえます。当時の明が中華料理の材料を求めていたので、隠岐のナマコなど、「長崎俵物」と呼ばれる海の珍味を輸出したものです。

●牛突きと古典相撲

「隠岐の牛突き」は、牛同士を闘わせるものです。愛媛県の宇和島にもありますが、宇和島では闘牛といい、隠岐では牛突きと呼びます。

牛突きは韓国にもあります。もしかしたら韓国から伝わったのかもしれませんが、流されてきた後鳥羽上皇をなくさめるために行われたのが起源だといわれますが、もしそれが本当なら日本最古のものということになります。

また、隠岐の牛突きは牛にタズナをつけたまま戦うのが特徴です。牛が勢子（綱取り）と一体化して闘うわけです。競技場はすりばち型になっています。牛の化粧回しは立派なもので、大相撲と変わらないぐらいの値段のものもあります。

牛同士の戦いは短いと5分、長いと1時間もかかります。長い場合、組み合って20分から30分たつと、よだれをたらしたり糞をするようになる。形勢が悪くなって逃げたいが、逃げかたが悪いと腹を突かれるので身を引くチャンスをうかがう。角は尖らせてあります。勝つとまた大変で、勝った勝ったと大騒ぎです。

隠岐の古典相撲は「徹夜相撲」「宮相撲」「柱相撲」「人情相撲」などと呼ばれます。隠岐では、相撲と民謡と牛突きには自然に人が集まるといわれます。人集めに苦労しません。

お昼から始まって、明くる朝の3時ごろまでやるから、徹夜相撲です。

隠岐空港の2千メートル滑走路完成、隠岐水産高校100周年記念など祝い事の記念に相撲をするしきたりがあり、こういうときに行われるのが宮相撲です。取り組みに勝った者には、土俵の脇に立てられていた柱が与えられるので柱相撲ともいわれる。この4本の柱は「四神」をあらわしています。

取り組みは同じ力士による二番勝負で行われます。先に勝った力士は、二番目の取り組みには勝ちをゆすり、一勝一敗の引き分けとします。互いに遺恨を残さないのが、人情相撲ともいわれるのです。

そのほか、隠岐では民謡が盛んです。いまや西日本で民謡のメッカとなっており、歌い手たちの登竜門となりつつあります。そのほか、舞楽、指定文化財である神楽、いぐり凧、裸トンド、馬入れ神事などさまざまな民俗文化があります。

もちろん、天然のアワビやサザエ、岩ガキ、松葉ガニなど四季を通じた海の幸が豊かです。サバでだしをとり、そば100%の隠岐そばなどのごちそうもあります。みなさん、ぜひ「とって隠岐の宝島」にお越しください。